

実践的コミュニケーション能力を育成する英語科指導方法の研究

- 表現力を高めるための音読指導の提案 -

鹿島市立西部中学校 教諭 小柳 久美子

要 旨

本研究は、表現力を高める音読指導を通して、実践的コミュニケーション能力を育成することを目指したものである。インプットの方法としての音読指導に焦点を当て、チャンク(語のかたまり)を意識したペアによる音読や、中学生にもできるシャドウイング、場面を設定した例文の音読などの効果について検証を行った。その結果、これらの音読指導を通して、生徒は英語の音韻システムの理解が進み、インプットによって脳の中に英語を取り込む量が増え、コミュニケーションテストでの表現の質が高まるなど、音読の有効な活用が表現力の向上につながる事が分かった。

<キーワード> 表現力 音読指導 実践的コミュニケーション能力 チャンク(語のかたまり)
ペアによる音読 シャドウイング

1 主題設定の理由

『『英語が話せる日本人』の育成のための行動計画』の中で、中学卒業後に求められる英語の能力はあいさつや応対、身近な暮らしにかかわる話題などについて平易なコミュニケーションができる(実用英語検定3級程度)とされている。このことを達成させるためには、基礎基本の確実な定着を図り、確かな学力を身に付けさせることが必要である。英語の基礎基本をはぐくむ手法として中嶋は、「音読がすべての基本だと考えている」⁽¹⁾と述べている。また、土屋は「音読は読解活動というよりも表出活動で、リーディングというよりはスピーキングの活動である。音読は基礎的能力を養うものであるが、それはスピーキングのトレーニングをしながら言語の基礎的能力を養成するためのものである」⁽²⁾と述べている。つまり生徒が音読の練習を行えば、平易なコミュニケーションを行うための基礎的能力が身に付くということである。さらに、音読の練習を工夫すれば、表現力と同時にリスニングの力も伸びるということでもある。これらの活動を継続的に行えば、実践的コミュニケーション能力の育成につながると考えられる。

本校1年生に行ったアンケートによれば、コミュニケーションの活動を楽しんでいる反面、間違えることを恐れ、英語で積極的にコミュニケーションできない生徒が多い。そこで、本研究においては、間違いを恐れずに、英語でコミュニケーションさせる授業の在り方を探究した。そのために、すべての基本である音読の指導を土台として、実践的コミュニケーション能力を育成したいと考えた。特に、表現力を身に付けさせ、英語を学習する楽しさや、英語によるコミュニケーションを通して、互いを高め合う喜び、互いを知ることのすばらしさなどを感じてほしいと考え、本主題を設定した。

2 研究の目標

音読指導を通して、生徒一人一人が英語で表現することに自信をもち、積極的にコミュニケーションをする方策を探る。

3 研究の仮説

表現力を高めるために、次頁のような手立てを取って、ペアによる音読練習を行えば、実践的コミュニケーション能力が高まるであろう。

チャンクごとに、区切って音読練習させる。

単元ごとの重要表現をまとめたワークシートを使って、音読練習させる。

4 研究の内容と方法

実践的コミュニケーション能力と音読との関連について、文献や資料を基に理論研究を行う。

表現力に関する実態調査を行い、音読との関連性を分析する。

検証授業(1年生)を行い、音読と表現力の関連性を検討し、考察する。

研究の成果と課題をまとめる

5 研究の実際 (文献による理論研究等)

(1) 音読と実践的コミュニケーション能力との関連

人が言語を理解する時、ある大脳の中の特定のプロセスを経て初めて理解される。人が文字を見れば、まずそのメッセージはヴェルニッケ中枢で理解される。それを音読して音声化しようとするれば、そのメッセージはブローカ中枢へ伝えられて、視覚言語が音声言語化され、口から音声を発生することになる。そうして発せられた音声を自分の耳で聞くと、再びヴェルニッケ中枢でその正否を理解することになる。この2つの中枢の間でのインタラクション(相互関連)を頻繁に引き起こしていけば、その言語の知識が受身的なものから、能動的なものに変容し、その言語がいつでも自由に使える状態になる。このことを内在化と言う。実践的コミュニケーション能力を養うためには、音読によって、人為的にこの大脳の中での循環を繰り返し、脳の中に英語の基礎回路を作ることが必要である。英語の基礎回路とは、脳の中に英語がいつでも自由に使えるシステムを作ることである。この基礎回路を作ることにより英語によるコミュニケーション能力が高まると考える。

(2) 生徒の表現力に関する実態

10月に行った所属校1年生のアンケートによると家庭で音読練習を行っている生徒は34.4%で、音読を必要と感じて、自主的に実践している生徒は全体の半分以下であった。また、同月に実施された佐賀県中学校教育研究会英語部会の学力調査では、図1で示しているように、理解の能力に関する設問の通過率は88.7%で、表現の能力のそれは65.6%であった。表現の能力に関する設問の通過率が、理解の能力のそれに比べ、明らかに低かった。音読練習が不十分なことが、表現力が付いていない原因の1つではないかと考え、音読練習を指導の中心として表現力の向上を図ることが必要ではないかと考えた。

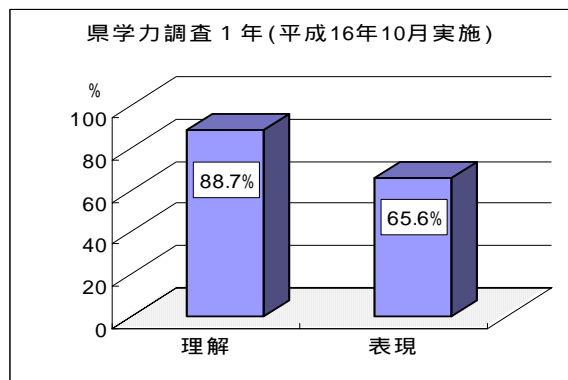


図1 県英語学力調査の評価の観点別の通過

(3) 音読にかかわる有効な手立て

ア ペアを主体にした音読練習

音読の形態としてペアで音読練習を行わせた。一方が音読している時に、パートナーが聞きながら確認するという形態の音読練習を継続的に行えば、パートナーのリスニング力の向上にもつながる。また、同時にたくさんの英文を聞いて声に出すことが、単元の基本文の構造や、英文の統語の構造を理解することにつながり、次のコミュニケーション活動へのステップになると考える。

イ 多様な音読指導の提示

授業中の音読練習パターンとして、「個人読み」「区切り読み」「時差式シャドウイング」「時差式通訳読み」の順に練習させ、スピーチなどの表現活動にまでつなげるようにした。

また、場面設定のある対話がメインの時には、更に「キーワード読み」と「Q & A 読み」を加えた。また、授業中だけでなく家庭学習でも使えるような音読チェック表を作成し、学校での指導と家庭での練習で音読の成果が上がるようにした。その際に注意すべき点などは表1にまとめている。

表1 音読の種類と注意点

| 音読の種類 | 方 法 | ポイント, 注意すべき点など |
|----------------|--|---|
| 個人読み | ・個人で数回読む | ・個人読みの前の一斉読みで英文の正確な読み方を身に付けさせる ・1分～3分の時間を設定し、目標回数を設定させる |
| 区切り読み | ・個人でチャンクごとに、黙読してから音読する | ・最初は短いチャンクごとに挑戦させる ・2回目からは1文を見ないで言うようにさせる |
| 時差式 シャドウイング | ・ペアの一人が読んだ1文又はチャンクを聞いてから、もう片方が何も見ないで英文を言う ・終わったら交代する | ・相手の目を見て、はっきり大きな声で音読させる ・自信のある生徒から最初にさせる ・全員立って行わせ、終わったら座るように指示する |
| 時差式 通訳読み | ・ペアの一人が読んだ1文又はチャンクの日本語訳を聞いてから、もう片方が何も見ないで英文を言う ・終わったら交代する | ・相手が、英文を言えない場合はヒント(英文の一部)を英語で出させる ・全員立って行わせ、終わったら座るように指示する |
| キーワード 読み | ・ペアの一人が読むキーワードを聞いてから、もう片方が何も見ないで英文を言う ・対話の場合は質問を聞き、答えの英文のキーワードを聞いてから答えを言う | ・キーワードは最初の単語や、文の中で重要な役割を果たしている単語にする ・前もって、個人の練習の時間を与える |
| Q & A 読み | ・ペアの一人が読む質問を聞いてから、もう片方が何も見ないで答えの英文を言う | ・前もって個人で練習させ、暗記の時間を与える ・基本的な文が言えたら1点、難しい文が言えたら2点など、ポイント制にするなどして意欲をもたせる |

ウ チャンクを意識した音読練習

(ア) 音読におけるチャンクの指導

生徒が英語の語順に慣れるために、前もって、資料1のような教科書の英文をチャンクで区切り、チャンクごとに日本語訳したものを配布する。そして、それを音読練習の時に使うようにすれば、生徒が英文を文頭から、チャンクごとに意味を理解しながら読み進めることが可能になる。それが可能になれば、初めて聞いた英文でも文頭から理解できるようになる。そして、これを繰り返すことで、実際に英語を話す時に、チャンクをうまく組み合わせることで英語を話せるようになると思う。

(イ) チャンクの区切り方

チャンクの区切り方は、一般的には句や節で区切るのが普通である。中学生の入門期に適した区切り方は、コンマの後、連語の前、接続詞の前などが考えられる。また、「I play tennis.」等の3語程度の英文は区切らないでもよいと思われるが、「I play tennis in the park.」になると、「in」の前で区切った方がよいと思われる。

資料1 チャンクで区切った英文と訳

One way, / or round trip? /
Big houses, / big yards, / big hats, / and big sandwiches. /
What do you have / in your pocket? /
I run here / with my dog / every morning. /
片道 / それとも往復? /
大きな家 / 大きな庭 / 大きなぼうし / そして大きなサンドイッチ。 /
何を持っているのですか。 / あなたのポケットに / 私はここを走っている。 / 犬と一緒に / 毎朝 /

エ 場面を意識した音読練習

実際と近い場面を設定し、生徒が音読によって自分のものにした表現を使う。そして、その表現が通じた喜びを味わうことで、生徒が音読の効果をもっと実感できるようになる。また、音読を通してある場面の例文を使えるようになることによって、生徒は自分の表現力が高まっていることを実感する。生徒が英文を読めるようになることが目標ではなく、表現力を高めるためのステップであることに気付くことで、音読の宿題を課さなくても自主的に家で音読練習を行うようになると思う。

6 研究の実際 (授業を通じた実践的研究)

(1) 検証授業 (平成16年11月)

ア 検証の視点 意味の区切りに注意した音読指導後における音読の高まり(仮説)
重要表現集を使った音読練習後における表現力の高まり(仮説)

イ 検証授業 の概略

Sunshine English Course 1 Program 7 「タコマの牧場で」で、まず仮説 のチャンクで区切った音読練習の効果を検証する授業を行った。手立てとして本文を音読練習する時に、前もって前頁資料1のようなチャンクで区切った英文と訳を配布し、前頁表1に示す「個人読み」から「時差式通訳読み」までの4種類の音読練習を行い、その後にグループで音読を発表させた。次に、仮説 の重要表現集を使った音読練習の効果を検証するために、自己紹介の重要表現を集めた例文集(資料2)を集中的に音読練習させ、最後に何も見ないで自己紹介を行わせた。

資料2 自己紹介の例文抜粋

| |
|--|
| 名前について |
| Hi, I'm Tom. |
| Hi, my name is Jim. |
| 出身について |
| I'm from New York. |
| 住んでいるところについて |
| I live in Tokyo. |
| 学校のことについて |
| I'm a student at Seibu junior high school. |
| 趣味などについて |
| I like <u>sports</u> . |
| I like <u>baseball</u> very much. |
| 下線部は自分のことにする |

ウ チャンクで区切った音読練習の効果についての検証(仮説)

時間内に「通訳読み」まで達した生徒が85%いた。このことから、チャンクで区切られた英文が、生徒に音読の手助けになっていたと考えられる。授業後のアンケートでは「内容を理解しながら音読できたか」の問いに対して生徒が90%の生徒が「できた」を選んでおり、生徒は、教科書の英文をチャンクで区切ることによって、内容を理解しながら読み進められるということを実感したようである。

エ 重要表現集を使った音読練習の効果についての検証(仮説)

全員の自己紹介を録音し、更に文章化し、それを基に表現力の高まりを検証した。「流暢さ」(文の数、発語数など)と「正確さ」を評価のポイントとしている。「流暢さ」の面では、2学期の初めに自己紹介をさせた時には2~3文でしか言えない生徒がほとんどであったが、今回は、例文を見ないで、5文以上の自己紹介を言えた生徒が、70%まで増えた。また、「正確さ」の面では、90%の生徒が正確な英文を言っていた。このことから、重要表現集を使った音読練習が、「流暢さ」と「正確さ」の両面において効果があったと考えられる。

(2) 検証授業 (平成17年2月)

ア 検証の視点 重要表現集を使った音読練習後における表現力の高まり(仮説)

イ 検証授業 の概略

Sunshine English Course 1 Program 9 「カードをもらってうれしいな」で、レストランの場面での重要表現集を作成し、それを使った音読指導後の表現力の高まりを検証した。レストランでの食事という場面設定で、生徒が客役となり、店員役のALTと対話をするコミュニケーションテストを行った。コミュニケーションテストの前に、前頁表1に示す「個人読み」から「Q&A読み」の音読練習を集中的に行った。資料3を使った音読練習は、読む順番が分かりにくく、英語で表現することが苦手な生徒にとっては、読みにくかったようであった。また、音読練習の種類が多すぎて、生徒が音読の伸びを実感できなかった。そこで、次の授業では前時の反省をいかしてワークシートを資料4のように作り変え、店員

資料3 レストランの例文1抜粋

| | |
|-------------------------------------|---------------------------------------|
| 店員: Here's the menu. | 客: <u>Thank</u> you. |
| | <u>What</u> do you recommend? |
| 店員: Would you have a salad or soup? | 客: I'll have a <u>soup</u> . |
| | What <u>kind</u> of soup do you have? |
| 店員: Here you are. | 客: <u>Thank</u> you. |
| | <u>I didn't</u> order this. |
| | I ordered <u>steak</u> . |
| 四角で囲んだ単語はキーワード読み時のキーワード | |

資料4 レストランの例文2抜粋

| | | | |
|---------------------------------------|--|--|--|
| 店員: Here s the menu. | | | |
| 客: <u>Thank</u> you | | | |
| <u>What</u> do you recommend? | | | |
| 店員: Would you have a salad or soup? | | | |
| 客: I'll have a <u>soup</u> . | | | |
| What <u>kind</u> of soup do you have? | | | |
| 店員: Here you are. | | | |
| 客1: <u>Thank</u> you. | | | |
| 客2: <u>I didn't</u> order this. | | | |
| I ordered <u>steak</u> . | | | |
| 合計点 | | | |

と客の対話を縦に配置した。また、練習内容を精選して表2に示す「キーワード読み」を1回、「Q & A 読み」を3回行った。更に「Q & A 読み」をポイント制にして、基本の例文を1点、応用の例文を2点とした。そして、ペアで行う時にパートナーがマス目に文が言えたかどうかチェックするようにした。

ウ 重要表現集を使った音読練習の効果についての検証(仮説)

前頁資料4を使って「Q & A 読み」を3回行った。図2は答えの平均得点の推移を表したものである。完全正解であれば、13~14点になる。生徒は、コミュニケーションテストを直前に控え、高い目的意識をもって「Q & A 読み」に取り組んでいることが分かる。また、図3は「Q & A 読み」の合計得点による生徒分布を1回目と3回目とで比較したものである。図3から分かるように、合計得点が10点以上の生徒が3回目では6%増えている。このことから、繰り返し音読練習を行うことによって、表現が定着し、使えるようになってきていると思われる。また、図4はコミュニケーションテストの結果である。92.3%の生徒が、自分の力で正確な英文を使って、会話することができていた。このことから、表現の「正確さ」の面で十分な成果があったことが分かる。また、「流暢さ」の面では、10月に行った自己紹介では、例文を見ないで20語以上の英語を使った生徒が36.8%であったが、今回は59.4%に増えていた。これらのことから、重要表現集を使った音読練習が発話の「流暢さ」と「正確さ」の両面で、十分な結果をもたらし、表現力を高めたとと言える。

(3) 生徒の変容について

音読練習を中心とした授業を始めてから、以前より音読練習への意欲が高まったある生徒の変容を追ってみた。その生徒は1学期の期末テストの表現力に関する設問の通過率が20%程度で、10月のコミュニケーションテストの時は、自己紹介で自分の名前しか言えなかった。しかし、11月の授業では友達の手助けを借りて5文26語で自己紹介が言えるようになった。その後の授業でも生き生きとした表情で音読練習に参加した。2月の授業の感想で「今日は英語をペラペラと読むことができた。」と述べている。この生徒は、家で音読練習を2時間した後で、コミュニケーションテストに臨んだ。最後の応答が難しかったようだが、18語の英語を使い、きちんとALTと会話することができた。資料5はその生徒とA

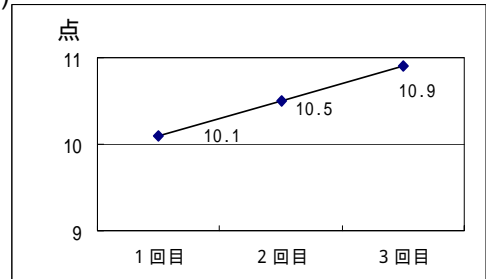


図2 「Q & A 読み」の平均得点の推移

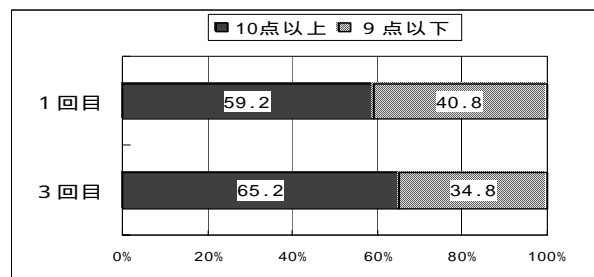


図3 「Q & A 読み」の合計得点による生徒分布

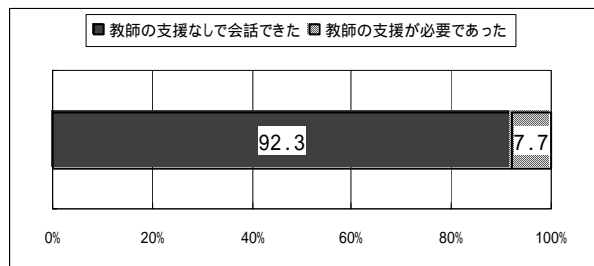


図4 コミュニケーションテストの結果

資料5 抽出生徒の会話

T: Here's the menu.
 S: Thank you.
 T: Are you ready to order?
 S: Yes, I am. I'll take this and this.
 T: How do you like your steak?
 S: Well done please.
 T: Would you like anything to drink?
 S: No, thank you.
 T: Here you are. (スパゲッティを出され)
 S: Thank you. (考えたあと、思い出せずに)

資料6 上位の生徒の会話の例

T: Here's the menu.
 S: Thank you.
 What do you recommend?
 T: I recommend spaghetti and ice cream.
 Are you ready to order?
 S: Yes, I am. I'll take steak and soup.
 T: How do you like your steak?
 S: Rare, please.

T: Would you like any drinks?
 S: Cola, please.
 T: Anything else?
 S: No, thank you.
 T: Here's spaghetti and soup.
 S: I didn't order this. I ordered steak.

L Tの会話を文章にしたものである。音読練習がこの生徒にとって大きな効果があったことが分かる。また、1学期の期末テストで表現力に関する設問の通過率が80%以上の生徒でも、10月のコミュニケーションテストの時には、自己紹介で7、8語程度しか使っていなかった。しかし、今回のレストランの場面でのコミュニケーションテストでは、これらの生徒も20語以上の英語が使えていた。前頁資料6は、それらの生徒の平均的な会話の例である。これらのことから、重要表現集を使った音読練習が、すべての生徒に効果があったことが分かる。

(4) 音読指導の有効性

約4か月間音読を中心とした授業を行ってきた。10月の段階では、自己紹介で2～3文の8語程度で自分の名前程度しか言えない生徒がほとんどだった。しかし、11月には約40%の生徒が自己紹介を5文、20語程度で言えるようになっていた。また、2月には約60%の生徒が5文、20語程度の英語を使ってA L Tと対話ができるようになっていた。これらのことから、音読指導が表現力を付ける上で効果があったと考えられる。また、2月

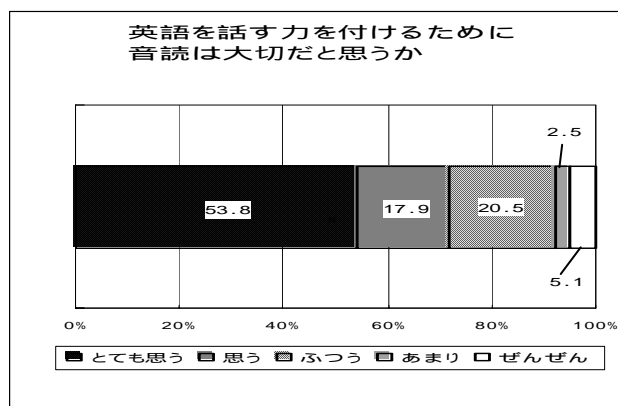


図5 音読に関するアンケート結果

にアンケートで、生徒に「英語を話す力を付けるために音読は大切だと思うか」と尋ねてみた。すると図5に示しているように、72%の生徒が「大切である」と答えており、その理由としては、43%の生徒が「音読をすると頭にどんどん入ってくる」などと述べている。また20%の生徒が、「正しい発音が身に付く」と答えている。このことから、かなりの生徒が、音読は英語を話す力を付ける上で役に立つと感じており、その効果を生徒が理解していることが分かる。

7 研究のまとめと今後の課題

(1) 研究のまとめ

実践的コミュニケーション能力を育成するための指導の中で、表現力を伸ばすためのインプットの方法に焦点を当て研究を進めた。特に音読を中心に研究を進めたが、生徒は積極的にいろいろな音読に取り組み、インプットによる英語の定着の量が増え、自己紹介やコミュニケーションテストなどの表現活動では、「流暢さ」と「正確さ」の両面で効果が見られた。

(2) 今後の課題

今回の研究は、実践的コミュニケーション能力の中でも、特に表現力を伸ばすための研究であった。発表の場面でも、音読練習した英文は上手に使えていた。しかし、自分で考えた英文を積極的に使った生徒はまだ少なかった。今後はチャンクを意識した音読指導を定着させ、多くの生徒が英語を自由に使えるような工夫を行う必要がある。

《引用文献》

- (1) 三浦 孝, 弘山貞夫, 中嶋洋一編著 『だから英語は教育なんだ』 2002年 研究社 p.72, p.114
- (2) 土屋澄男著 『英語コミュニケーションの基礎を作る音読指導』 2004年 研究社 p.78-79

《参考文献》

- ・ 國広正雄編 『英会話・ぜったい・音読入門編』 2001年 講談社
- ・ 土屋澄男著 『英語コミュニケーションの基礎を作る音読指導』 2002年 研究者
- ・ 斉藤栄二著 『基礎学力をつける英語の授業』 2003年 三省堂